No.

小栗虫太郎は怪物である。彼はどこからともなしに、ヒョッコリと現はれて、忽ち探偵小説界の寵児となった。……その出現の彗星的なる、忽ちにして探偵小説界の寵児になった點、又その前身の曖昧模糊たる所、正に彼は乱歩二世である。一世乱歩出でゝ十年にして、奇才虫太郎が現はれたのだ。

『虫太郎氏の『白蟻』』
「読売新聞」昭和10年（1935）9月14日

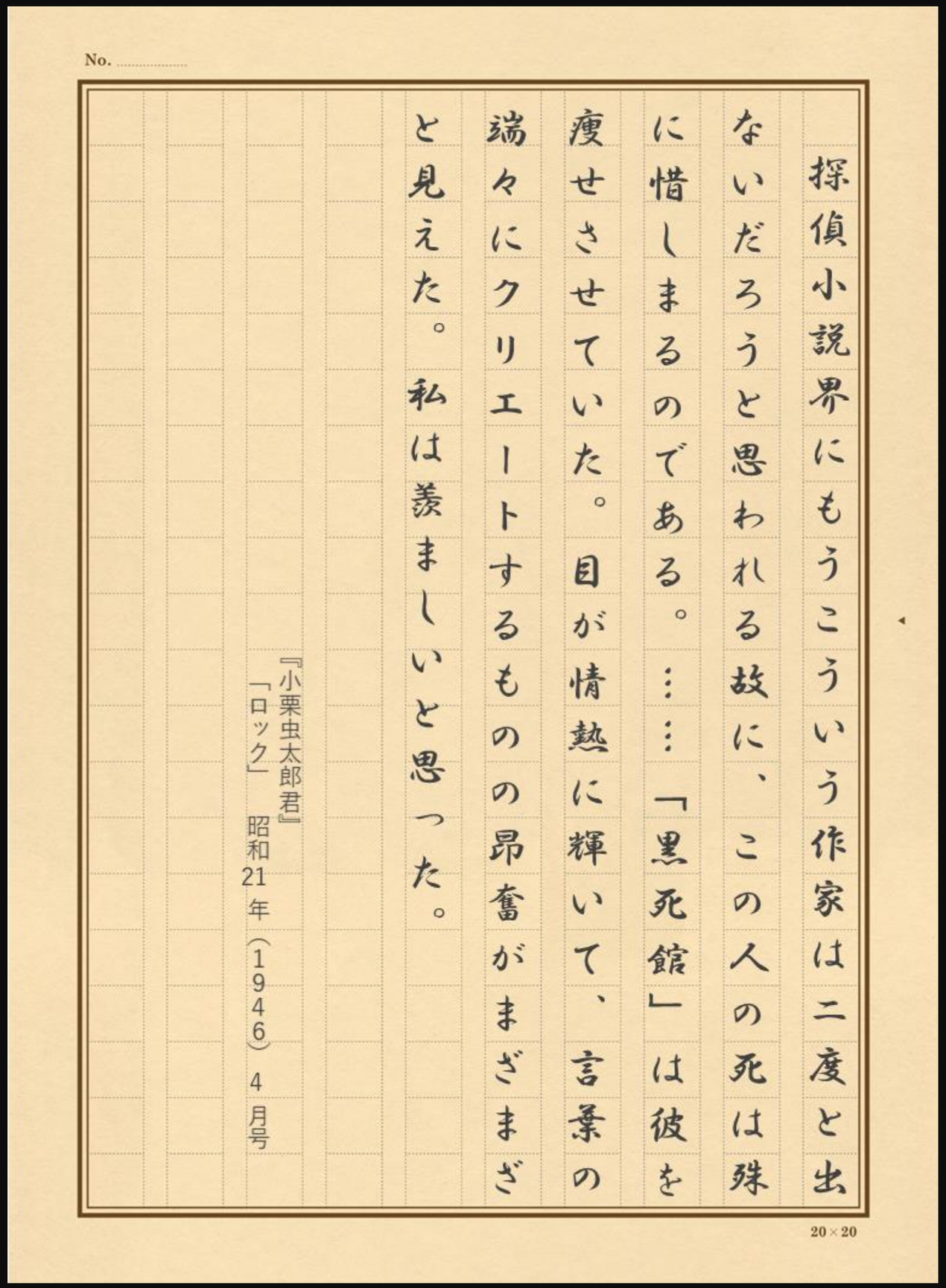
20×20

SABURO KOGA

甲賀 三郎

こうが　さぶろう
明治26年（1893）－ 昭和20年（1945）

小説家。本名は春田能為（はるたよしため）。農商務省臨時窒素研究所の技師をするかたわら、大正12年（1923）「新趣味」の懸賞に応募した処女短編『真珠塔の秘密』が1等に当選してデビューした。科学者の知識を生かして、理化学トリックを使った作品が多い。昭和10年（1935）には「ぷろふいる」誌上にてパズル性を重視する立場を打ち出し、文学派の木々高太郎（きぎたかたろう）と論争を展開した。



探偵小説界にもうこういう作家は二度と出ないだろうと思われる故に、この人の死は殊に惜しまるのである。……「黒死館」は彼を痩せさせていた。目が情熱に輝いて、言葉の端々にクリエートするものの昂奮がまざまざと見えた。私は羨ましいと思った。

『小栗虫太郎君』
「ロック」　昭和21年（1946）4月号

20×20

RANPO EDOGAWA

江戸川 乱歩

えどがわ　らんぽ
明治27年（1894）－ 昭和40年（1965）

小説家、評論家。本名は平井太郎（ひらいたろう）。筆名は、ミステリの始祖エドガー・アラン・ポーに由来する。様々な職に就くが長続きせず、失業中の大正11年（1922）『二銭銅貨』『一枚の切符』を「新青年」に送りつけ、その高い完成度で編集長の森下雨村（もりしたうそん）を驚かせた。大正14年（1925）、明智小五郎を登場させた『D坂の殺人事件』『心理試験』の好評により、作家専業を決意して上京する。戦中は作家活動をほぼ全面的に禁止された。戦後は、創作活動以外の活躍が顕著で、探偵作家クラブを結成、海外探偵小説評論『幻影城』（昭和26年）執筆、ハヤカワ・ミステリなどの叢書刊行にも助力し、江戸川乱歩賞を制定して新人作家の育成に尽力した。

No.

つまり虫太郎は私のピンチヒッターとしてデビューしたのだが、世にこれほど強力なピンチヒッターがまたとあろうか。私が健康であったとしても、「完全犯罪」ほど魅力ある傑作を書く自信はなかった。

『小栗虫太郎とピンチヒッター』
「朝日新聞」昭和48年（1973）4月23日

20×20

横溝 正史

SEISHI YOKOMIZO

よこみぞ　せいし
明治35年（1902）－ 昭和56年（1981）

小説家。本名は横溝正史（よこみぞまさし）。大正10年（1921）『恐ろしき四月馬鹿（エイプリル・フール）』が「新青年」の懸賞に入選。大正15年（1926）に博文館に入社し、「新青年」「文芸倶楽部」「探偵小説」の編集長を務めるかたわら、創作や翻訳を発表。戦時中、カーを読み、尋問形式･捜査活動に終始しない謎解きの存在を知る。昭和20年（1945）岡山県に疎開。終戦後、同地を舞台にした長短編を続々と発表。名探偵金田一耕助初登場となる『本陣殺人事件』（昭和21年）は雪の密室殺人を描いたもの。続く『蝶々殺人事件』（昭和22年）『獄門島』（昭和23年）で、本格派の第一人者としての地位を確立。昭和39年（1964）を最後に休筆していたが、1970年代になると文庫や角川映画によるリバイバル･ブームに応える形で再び筆を取った。

TATSUHIKO SHIBUSAWA

澁澤 龍彦

しぶさわ　たつひこ
昭和3年（1928）－ 昭和62年（1987）

No.

いったい、虫太郎はどれほどの読書家であり、彼の語学力はどれほどの程度であり、彼の蔵書はどれほどの量に及んでいたのか。考えれば考えるほど、これは不思議な謎のように思われてくる。

『解説』
『黒死館殺人事件』桃源社、昭和44年（1969）12月

20×20

しぶさわたつお
昭和時代後期のフランス文学者、小説家。本名は澁澤竜雄。サド、コクトーなどの現代文学研究を柱に美術評論、文明論も手がけ、異端文学、オカルティズムの紹介者、幻想小説の作者として知られる。昭和36年（1961）『悪徳の栄え』の翻訳が猥褻とされ、サド裁判の被告となった。昭和62年（1987）8月5日死去。著作に『サド復活』、小説に『高丘親王航海記』など。